

# 「2030年の水島、こうなったらいいな」

## 持続可能性アセスメント 方法書



よみがえれ水島のまち 公害のまちから緑と水、にぎわいのまちへ  
水島再生プラン(1995年)

「2030年の水島、こうなったらいいな」は、公害患者さんから託された「水島再生プラン」(1995年)をもとに、現状を環境アセスメントの手法で点検し、新たに作成したものです。これは、国連が定めた「持続可能な開発目標 (SDGs)」の達成年にあわせて目標を立てています。この方法書は、私たちの活動が目標達成に向けて前進できているのかどうかを点検・評価していくための計画です。

### <構成>

1. 市民からの「持続可能性アセスメント」
2. 「2030年の水島、こうなったらいいな」のSDGs
3. 評価活動の進め方



2020年10月25日

公益財団法人水島地域環境再生財団(みずしま財団)、NPO地域づくり工房

※この活動は2020年度独立行政法人環境再生保全機構「地球環境基金」の助成を受けています。



## 1. 市民からの「持続可能性アセスメント」

### (1) 持続可能性アセスメントとは

あらゆる開発行為の政策・計画・実施・事後において、それらが環境・社会・経済に与える影響を事前に見積り、社会の持続可能性を高める方向で作用しているかどうかを点検・評価する取り組みです。日本では制度化されておらず、定義や実施方法についても確立されていません。

2015年、国連が2030年を目標に、「持続可能な開発目標 (SDGs)」を示したことで、民間部門を含むあらゆる国や地域での開発計画はSDGsに対する取組姿勢を打ち出すことが求められるようになりました。そうした中で持続可能性アセスメントに対する関心が高まっています。

### (2) 市民からの持続可能性アセスメントの意義

私たちが実施する持続可能性アセスメントは、「2030年の水島、こうなったらいいな」の実践に際して、SDGsの達成に寄与する観点から、自己点検・評価する取り組みです。

持続可能性アセスメントの定まった方法がない中で、私たちのやり方が適切なものかどうかわかりませんが、ひとつの提案となることを願っています。

市民からの持続可能性アセスメントには以下3つの意義があると考えます。

#### ①自己点検・評価の仕組みとして

市民活動による中・長期の地域づくり計画について自己点検・評価する際に、国際的な目標達成への寄与を具体的に認識することのできる仕組みとなります。また、持続可能性アセスメントにおいて、活動の獲得目標にそった評価指標を設定し、データを蓄積することは、活動を計画的に進めていく上で有意義なものとなります。また、各地で活動する市民活動が交流するときのテーマ設定などにも役立つことでしょう。

#### ②地域社会など第三者から評価していただく目安として

市民からの持続可能性アセスメントでは、活動の節目における点検・評価に際して、地域社会などの関係者に意見を求め、評価の参考にします。獲得目標や評価指標、それに基づくデータの蓄積は、地域社会など第三者が市民活動を評価する上での目安となり、市民活動への理解と協力を地域社会などから引き出していく上で有益です。SDGsの目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」を実践するものとなります。

#### ③新しい尺度の提案

「2030年の水島、こうなったらいいな」の持続可能性アセスメントが設定する評価指標は、公害患者さんたちに託された思いを土台としています。このように、市民からの持続可能性アセスメントが提起する評価指標は、市民のそれぞれの志に基づくものです。こうした取り組みが各地で広がることで、「持続可能な開発の進捗状況を測る GDP 以外の尺度を開発する既存の取組を更に前進させ」(SDGs 17-19) することに寄与することが期待されます。

### (4) 方法書の位置付け

方法書とは、アセスメントの実施方法についてまとめた書類のことをいいます。

この方法書は、私たちが行う地域づくり活動についての持続可能性アセスメントの実施方法について公表し、広範な市民・専門家の協力を請うためのものです。

皆さまからのご意見やご助言をお待ちしています。

## 2. 「2030年の水島、こうなったらいいな」のSDGs

私たちは、財団発足時から蓄積してきたデータや活動経験、公害患者さんたちや地域の方々への聞き取りを通じて、水島再生プラン（1995年）が掲げた7つの提案について、今後も追及し続ける課題であることを再認識しました。

その上で、みずしま財団や地域社会での取り組みなど、現在の状況を踏まえて、7つの提案の下に、「2030年の水島、こうなったらいいな」という目標を新たに設定しました。7つの提案の達成度合いをはかる指標を示し、SDGsとの関係を紐づけしました。

### 提案1：グリーンベルト（緑の木）でコンビナートをつつむ

#### ■2030年の水島、こうなったらいいな

- ◎商店街内の未活用空間や基幹公園が樹木に覆われた緑地になり、緑多い水島のまちづくりを進める。
- ◎産業部門での大幅なCO<sub>2</sub>排出量削減を実現するために、既存技術を生かした設備更新や、再生可能エネルギー・省エネルギー設備の導入を進める。

#### ■評価指標：岡山県内のCO<sub>2</sub>排出量

- ・現状（2015年）：4,939万t（岡山県温室効果ガス排出量算定・報告・公表制度より）
- ・2030年：1,975万t



### 提案2：まちに賑わいの拠点を

#### ■2030年の水島、こうなったらいいな

- ◎水島で学ぶ若者が、歴史や過去の経験から学び、地域の魅力を発見し、新しい価値を創造できるようにする。
- ◎学びを支える人・資源・情報が集まるようにする。未来をつくりだす学びの拠点（資料館、交流館）の整備を進める。

#### ■評価指標：水島地域で提供できる学びのプログラムの数

- ・現状（2019年）：12件（環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会実績）
- ・2030年：30件



### 提案3：健康、福祉のまちづくり

#### ■2030年の水島、こうなったらいいな

- ◎地域住民が主体的に実施する肺年齢測定等を通じて、COPDや呼吸リハビリテーションのことであり、早期発見・治療の取り組みが進み、健康的に暮らせる街になるようにする。
- ◎他地域からの移住者、一人暮らしの高齢者、子育て世代などが孤立しないよう、支え合うしくみづくりを進める。

#### ■評価指標：COPD（慢性閉塞性肺疾患）の認知度

- ・現状（2016年）：38.7%（みずしま財団調べ）
- ・2030年：50.0%



#### 提案4：芸術、科学をテーマに

##### ■2030年の水島、こうなったらいいな

- ◎みずしま滞在型学習コンソーシアムで長期滞在プログラムを整備し、企業では国内外の若者が科学技術や環境対策技術を学ぶことができる。
- ◎若手のアーティストが大学と連携し、創造的な活動のできる地域と認識されることで、移住・定住する人が増えるようにする。
- ◎地域から新たな技術や文化の発信を進める。

##### ■評価指標：大学生・留学生の研修受入数

- ・現状（2018年）：275人（みずしま財団実績）
- ・2030年：600人



#### 提案5：原風景、原体験を大切に

##### ■2030年の水島、こうなったらいいな

- ◎農漁業の作り手と買い手をつなぐ仕組みができるようにする。適正な価格での買取がされるなど、地域の小規模な農漁業が、経済的に成り立つようになる。
- ◎水島学講座で、干拓の歴史などを学び、海拔が低いといった地域の特性を知ることで日ごろの備えを見直すなど、防災・減災への意識を高める。

##### ■評価指標：水島学講座の開催数

- ・現状（2017年）：7回（前出の環境学習協議会実績）
- ・2030年：12回



#### 提案6：水島臨海鉄道の延長

##### ■2030年の水島、こうなったらいいな

- ◎水島臨海鉄道を地域の基幹交通として、地域内をつなぐコミュニティタクシーが使いやすい形で整備され、高齢者も移動に困らない地域になるようにする。
- ◎気候変動への対策として、環境負荷の少ない移動手段の実現に向けて、低公害車（電気自動車）バスが導入されるようにする。

##### ■評価指標：コミュニティタクシー利用者数

- ・現状（2019年）：234人（みずしま財団調べ）
- ・2030年：360人



#### 提案7：海辺、水辺を住民の手に

##### ■2030年の水島、こうなったらいいな

- ◎水島周辺の海辺や水辺が学びのフィールドとして活用されるようにする。その取組を行政、企業、NPOが協力して支援する仕組みづくりを進める。
- ◎八間川の川幅を広げ、傾斜護岸にすることで、親水空間としての機能と、豪雨等災害時の遊水機能が確保されるようにする。
- ◎高梁川から流入する海ごみの減量化を進める。

##### ■評価指標：海ごみについて学んでいる人の数

- ・現状（2019年）：450人（みずしま財団実績）
- ・2030年：720人



### 4. 評価活動の進め方

## (1) 基本方針

私たちが実施する持続可能評価アセスメントは、公害患者さんたちから託された「水島再生プラン」(1995年)の実現に向けて、国際的な目標であるSDGsに呼応しながら、私たちの活動を自己点検し、地域の方々のご理解とご協力を広げていくことを念頭に、以下の基本方針により実施します。

### ①わかりやすさ

水島におけるSDGsや持続可能な開発について考え、対話し、学びきっかけとなるように、わかりやすい内容となるようにします。

### ②市民らしさ

私たちが実施する持続可能性アセスメントは、生活感覚に根ざし、社会のあり方に対する問題意識を持った、市民活動らしさを重視します。

### ③広がりや成長

評価活動への幅広く市民の参加を呼びかけ、意見を吸収していきます。そして、寄せられる意見や事業の進展などを踏まえて、実施内容を充実させていきます。

## (2) 実施主体

公益財団法人水島地域環境再生財団(みずしま財団)が実施主体となって、地域の関係者の方々にご協力を求めて、情報収集や調査活動、ワークショップを開催することで、節目ごとに点検・評価を行い、その成果をWEB上に公開します。

## (3) 進め方

### ①方法書の作成(2020年度)

#### イ) 2015年データの収集と課題整理

「2030年の水島、こうなったらいいな」が設定した各指標について、2015年(SDGsの開始年)を評価の起点に設定し、該当する統計情報などを収集します。それをもとに2015年時点での水島地域におけるSDGs上の課題を整理し、みずしま財団として重点をおくべき活動を整理します。

#### ロ) 目標設定と評価シートの作成、公開

上記を踏まえて、今後の点検評価を実施するための評価シートを盛り込んで、方法書として作成し、「2030年の水島、こうなったらいいな」とともに公開します。

### ②中間評価書(2021年度、2026年度)

2015年データを起点に、2020年と2025年を中間評価年として、その翌年度にデータを収集し、地域の状況の変化、活動内容などを点検し、地域関係者の声を聴きながら、中間評価を行います。その結果を中間評価書としてとりまとめ、公開します。

### ③総括評価書(2031年度)

2031年度に、2030年データを収集し、地域の状況の変化、活動内容などを総括し、地域関係者の声を聴きながら、最終的な評価を行います。また、岡山県・国、国連におけるSDGsの取組みに対する総括を参照し、水島地域における取組みを位置付けます。それらの結果を総括評価書としてとりまとめ、公開します。

(4) 評価シート案

水島再生プラン (1995年)	評価指標	評価年	数値	コメント
1 グリーンベルトでコンビナートをつつむ	岡山県内のCO <sub>2</sub> 排出量	2015	5,167万t	2013年度（岡山県地球温暖化防止行動計画の基準年度）比で2.8%（148万t）の減少。産業部門が62.2%と全国平均32.7%を大きく上回っている。
		2020		
		2025		
		2030		目標値：2,067万t（6割減）
2 まちに賑わいの拠点を	水島地域で提供できる学びのプログラムの数	2015	10件	2013年に立ち上げた「環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会」でプログラムを整理した。
		2020		
		2025		
		2030		目標値：30件
3 健康、福祉のまちづくり	COPDの認知度	2015	36.7%	水島地区10か所（ミニ健康展会場8、他2）で実施、肺年齢測定・認知度調査実施。
		2020		
		2025		
		2030		目標値：50%
4 芸術、科学をテーマに	大学生・留学生の研修受入数	2015	758人	佐賀市立成章中学校（175人）、全国青年ジャンボリー（150人）含む。
		2020		
		2025		
		2030		目標値：600人
5 原風景、原体験を大切に	水島学講座の開催数	2015	0回	「水島いいところ探し」や「水島のまちを語り合う座談会」などを実施し、住んでいる人自身が地域を知ることの大切さを再確認したため翌年、水島学講座を実施へとつなげた。
		2020		水島学講座は2016年から開催。
		2025		
		2030		目標値：12回
6 水島臨海鉄道の延長	コミュニティタクシーの利用者数	2015	0人	
		2020		医療機関が実施する水島地域におけるコミュニティタクシーの取り組みは、2018年（H30）からスタートしている。
		2025		
		2030		目標値360人／年
7 海辺、水辺を住民の手に	海ごみについて学んでいる人の数	2015	500人	100人以上が参加するプログラムへの講師派遣が2件あり海ごみへの関心が高まりを見せていた。
		2020		
		2025		
		2030		720人／年

## 【専門家からのコメント】

### みずしま財団設立 20 周年事業

「2030 年の水島、こうなったらいいな」～持続可能な地域をめざして に寄せたコメント

コロナウイルス感染症は 2020 年、世界中の人々の暮らしを変え、未来を不透明なものにした。10 年前に東日本大震災を経験した多くの日本人は、自分の周りでも進む人口減少を感じた。コロナ禍で静まり返った日々を過ごし縮小した未来を予感した。

いつまでも人口は増えないから、二度とにぎわいは戻らないし経済も成長しない。家族は減り、地域社会に欠員が出て、会社や役所も半分閉鎖、町や村のスポンジ化が進んだ。この 4 月に人や車が消えた近未来の日本、決していつまでも持続しない世界を見た人々は、にぎわいは無理でも、せめて水は清く緑は豊かにと願うようになった。昔は輝いて見えた店や工場、学校やオフィスは古くなった。役目が終わったらきれいに畳んでもとに戻すお片付けをしよう。

深刻なことは、いくら道路や堤防を造っても災害は必ず起きる。次々と町や村を呑み込んでいく。いくら衛生に努めても未知のウイルスがやって来る。こんな脅威に晒された今、財産よりもまず命を守る行動が求められる。いくら望んでも今の暮らしと仕事はもう持続はしない。

いくら懐かしんでも若かった頃には戻れない。高度成長期のにぎわいは戻らないし、現在の産業経済を持続することはできない。だからその先、無駄な施設を畳み、豊かな陸、豊かな海に戻す作業を始める時代になった。造った責任、使った責任を果たし、健康と福祉を取り戻すために技術革新を進め、クリーンなエネルギーを使い、気候変動に対応する。世界の国々に先駆けて縮小が始まった日本の持続可能性とは、どこまで復原できたかを問うものだろう。2020 年の今を持続することでなく、持続的だった豊かな水島の海と陸、本来の健康な姿に戻すこと、人間が持続可能なのではなく、水島の、瀬戸内の、そして地球が持続可能な評価指標を掲げていこう。

従来と違う華やぎを

温暖化を遅らせ、安全な場所に移る

“新しい生活様式”と新しい常識、価値観

2020 年 10 月 22 日

宗田好史(京都府立大学教授)

※「2030 年の水島、こうなったらいいな」持続可能性アセスメント方法書へのご意見や感想をお寄せ下さい。

作成者：公益財団法人水島地域環境再生財団（みずしま財団）、NPO 地域づくり工房

助成元：2020 年度独立行政法人環境再生保全機構「地球環境基金」

発行日：2020 年 10 月 25 日

連絡先：みずしま財団 岡山県倉敷市水島西栄町 13-23（〒712-8034）

Tel：086-440-0121 Fax：086-446-4620 E-Mail：webmaster@mizushima-f.or.jp